



馬耳東風

郵便制度は、旧幕臣でありながら明治新政府の要職についた前島 密が、当時最も郵便制度が発達していた英国の郵便事業を視察して来て明治4年に始めた、と昔小学校か中学校の社会科で習った記憶がある。創業時は、東京・京都・大阪間に限られていたが、翌年には全国網となり、さらに翌年には、はがきが発行されたという。

年賀の書状を送ることは、平安時代後期には貴族の間では行われており、江戸時代に至ると町飛脚の登場もあって庶民の間にも浸透したという。江戸時代、雑俳集に、「六月に 年始の礼は 返り花」というのがあるそうだ。時期に関してはのんびりとしていたのだろうが、それにしても六月に年始の返事が届くとは狂い咲きだねと皮肉ったのだろう。

年賀の挨拶は短文ですみ、また他人に読まれても差し障りがあるわけでもないで書状の必要はない。で、郵便制度が整い、はがきが登場すると年賀の挨拶をはがきで送る人が急増し、明治20年前後には国民の間に年中行事として次第に定着して来たという。そのため、年末の26～28日あたりと元日の郵便物がふくれあがり、通常の郵便物の配達に遅延を来すようになったことから、明治32年に、「指定局での年賀郵便の特別取扱」が始まり、現在の制度の原型となった。

その後年賀状は年々増え続け、昭和10年には7億通を越えピークとなったが、12年の日中戦争を契機として急激に減少し始めた。そして戦局の悪化とともに、世の中の雰囲気は次第に、「年賀状どころではない」というようになり、15年には年賀郵便の特別取り扱いは「当面の間中止」となった。さらに16年の太平洋戦争突入以降は、当時の通信省が「生活改善・お互いに年賀状はよませ

う」と自粛を呼びかけるポスターまで作ったという。

敗戦後、昭和23年に「年賀郵便の特別取扱」が復活し、翌年に「お年玉くじ付きはがき」が誕生したのを契機として年賀状は飛躍的に増加していったが、これが年賀はがきの始まりであり、それまでは通常のはがきを年賀状として使っていたという。「お年玉くじ付きはがき」は、京都在住の民間人（林 正治氏）が、「年賀状が戦前のように復活すれば、お互いの消息もわかり、うちひしがれた気分から立ち直るきっかけともなる」と考え、〈年賀状に商品の当たるくじをつける〉、〈料金には寄付金を付加し社会福祉に役立てる〉というアイデアとともに、自分で作成した見本のはがきや宣伝用のポスターまで作って郵政省に持ち込んで実現したものだという（出典：年賀状博物館 <http://nengahaku.jp/history-1.html>）。

さて、時代はすすみ、「終活」や「断捨離」が流行語になったのをきっかけとして、『今年で年賀状を最後にしますが、これまでと同じようにお付き合い下さい』という主旨の年賀状を受け取るようになってきた。しかし多くの場合、年賀状のやりとりがなくなれば、お付き合いも途絶えるというのが現実であろう。両面とも印刷という年賀状が増えてきたが、このような賀状は味も素っ気もなく、頂いてもうれしくない。今年はパソコンメールで10数通まとめて届いたが、お屠蘇気分もあって一瞥もせずにゴミ箱に入れた。そうかと思うと毎年唸るような版画に一言添えてくれる友もいる。印刷された年賀の挨拶の余白に書かれた文言は、いかに短くても私個人に向けられたものだけにうれしいものだ。私には版画のセンスも絵心も何もないので、これからは一言添えて、宛名は自筆というスタイルの年賀状を続けようと考えた正月だった。

(久)